（様式５）　　平成３０年度　　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	管 30K01	氏　名	馬見塚　拓也
研究主題 ―副主題―	自分事をつくりだして生かす道徳科の授業づくり ―抽出児童の発言・記述の分析を通じて―		
派遣先	創価大学教職大学院	担当教官	石丸憲一　渡辺秀貴
所属校	新宿区立落合第四小学校	校長	本間　基史

キーワード：自分事・自我関与・授業づくり

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

平成 27 年一部改正の小学校学習指導要領に基づき、実施となった「特別の教科　道徳」では、答えが一つではない道徳的問題について「考え、議論する道徳」の授業を通じて、子供の道徳性を養うことが目標となっている。その際、読み物教材を用いて登場人物の心情理解に終始する従来の道徳授業のあり方が課題として挙げられている。

この点を柳沼（2006）は、「子どもたちは建前的な価値にも共感し同調するが、それを本音の渦巻く現実生活にはなかなか適応できない」と指摘し、「教師が価値を一方的に教え込むのではなく、子どもたちとの対話の中で価値の自覚を促す」問題解決型の授業を示している。

また、「特別の教科　道徳の指導方法・評価等について（報告）」（以下、平成 28 年 7 月報告）では、「登場人物への自我関与」を鍵として、読み物教材を中心とした道徳授業も「質の高い多様な指導方法」として位置付けられている。しかし、これは従来の道徳授業においても、目指してきたことであるだろう。

石丸（2016）が、心情理解に偏った道徳授業は、問題意識をもたせることにとどまって、問題を自分のこととして考える授業ができていなかったと指摘しているとおり、「登場人物への自我関与」がなされている子供の姿を示してこそ、道徳授業の質的転換に資するのではないだろうか。つまり、読み物教材を用いた道徳授業の質的改善が重要だと言えるだろう。

そのためには、当事者意識をもち、道徳的問題を「自分事」と捉えて考える授業づくりが必要である。そこで本研究では、「自分事」とは何か、また、「自分事」はどのようにして表出されるのかを明らかにし、「自分事」を生かした道徳科の授業づくりに取り組んでいく。

２　研究の内容・研究の方法

永田（2018）は、読み物教材における自分事について、「自分ならばどうするか」「どうすることが最もよいのか」等の発問を通じ、登場人物と自分を投影させて考えることとしている。つまり、読み物教材における「自分事」とは、登場人物と自分を置き換えて、「自分だったらどうするか」を考えることと言えそうである。

また石丸（2018）は、子供の考えについて、社会規範や常識等を前提としている「あるべき姿」を示した建前と、建前を理解しながらも、そうはしたくない等の思いや欲求を表現した、本音があると述べている。そうであるなら、「自分だったらどうするか」を考えると、建前が強調されている場合もあれば、本音が強調されている場合もあるということであるだろう。

だが、実際の授業では、子供が抱き、表出する本音と建前は一人一人異なっており、自分事が具体的にどのようなものか、はっきりしていない。そこで本研究では、道徳授業における自分事を明らかにするために、下記のように検証授業を実施し、抽出した児童における発言・記述の分析に取り組むこととした。

〇第 1 回検証授業
　実施日：7 月 6 日（金）
　教材：「みんなのわき水」（日本文教出版）
　内容項目：公共の精神
〇第 2 回検証授業
　実施日：9 月 4 日（火）
　教材：「心をしずめて」（同上）
　内容項目：相互理解、寛容
〇第 3 回検証授業
　実施日：10 月 26 日（金）
　教材：「窓ガラスと魚」（同上）
　内容項目：正直、誠実

３　研究の結果

紙面の都合上、ここでは第１回目の検証授業での発問に対する抽出した児童の発言・記述についての分析、解釈の例を示す。

発問：「掃除をするつもりになった２人の気持ちはどのようなものだっただろう。」
【抽出した児童の発言・記述】
Ａ児：みんなが使うから掃除をしよう。
Ｂ児：湧き水を汲んで、早く家で凍らせて飲んでみたい。
Ｃ児：僕たちも困るし、後の人も困る。みんなが嫌な気持ちになるから、後の人たちのことも考えて掃除をした。
Ｄ児：早く水を汲みたいのにな。でも、他の人が困るな。掃除をしよう。

登場人物の２人で遊びにきた公園が、落ち葉で汚れており、「ご自由にお使いください」と書かれた看板を見て、自分たちが掃除をしなくてもいいだろうと葛藤しながらも、掃除道具を手に取った場面での発問である。

上記のように、抽出した児童のＡ児・Ｃ児・Ｄ児からは、「みんなのために」という道徳的心情が表現されており、私の予想した反応であった。一方で、Ｂ児の発言は突拍子もないものに感じられ、私は授業において適切に対応できていない。

しかし、この意見の背景には、掃除をすることは当然のことだとの考えがあったとも考えられ、この発言から、Ｂ児の「公共の精神」への理解が不十分だとは言い切れない。また、「早く家で凍らせて飲みたい」とは、「自分が登場人物の立場だったらどう思うか」との視点から出された本音であり、「登場人物への自我関与」がなされたと捉えることもできる。

もちろん、これはあくまで推測に過ぎないが、授業者として、そのようなことを考慮して、Ｂ児の発言に対して共感的な言葉を伝えつつ「掃除をしないで湧き水を汲むのか」と問い返す等の対応が大切であったと言えるだろう。

その後の発問において、子供が自己の生き方を振り返ることにつながらなかったのは、授業者がＢ児の本音を見極めて、全体に「自分事」を広げる指導をしなかったからだと考える。

４　研究の考察

３回の検証授業を通じて、自分事が生まれるきっかけが、大きく次の２点にまとめられることが分かった。

（１）登場人物の気持ちを問うことで、子供は登場人物と自分を置き換え、「自分だったら」と考えるようになる。
（２）「自分だったらどうするか」等の発問によって、子供は、自分の生活経験と関連した本音を表現するようになる。

このことから、読み物教材を用いた道徳授業における「自分事」とは、「自我関与における自分事」と「問題解決場面における自分事」があると考えた。そして、授業者がこのような自分事を意図的につくりだす手だてを講じることが、道徳授業の質的改善につながり、自らの生き方を見直す契機となる議論を生み出すことになるだろう。

それは上述のように「自分だったらどう感じるか」との直接的な発問だけでなく、教材場面について客観的な分析を促す発問においても「自分だったら」と考えて表現している子供がいたことが鍵だと考える。検証授業では、「問題解決場面における自分事」は「自我関与における自分事」の表出によって引き出されていたからである。

「自我関与における自分事」は、教材の問題場面と類似した経験をしている子供から表出されていたことから、「自分事」を意図的につくりだす上で、授業者による児童理解が一層重要になってくると言える。

５　今後の展望

当事者意識をもたせる手だてを検討し、構成した検証授業は、結果的に「心情理解に偏った」授業であったと痛感した。それだけ、道徳授業の質的改善は難しい課題だということだろう。しかし、ここで一例を挙げたように、子供は、授業者が思いもよらない場面で、教材を「自分事」として捉え表現していることが分かる。

つまり、「考え、議論する道徳」の実現のためには、授業者が子供の表現する「自分事」を的確に見極めて、指導に生かすことが不可欠ということだ。そのための方途が、子供の考えを広く受けることのできる、「自分事」を意図的につくりだす視点をもった授業づくりであるのだ。